

2009年8月9日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一 7章 1～17節

説教題：心を主に向ければ

先日、ある方からお電話をいただき、こんな質問をされました。「旧約を読んでいると、神が時々恐ろしく感じられるのです。いったいどう考えたらいいのですか。」

前回の箇所でも、イスラエルの民が神の契約の箱を不用意に開け、中を見てしまったために、五万七千人が倒れたとありました。神はなぜそこまでされるのか。あまりの厳しさにとまどいます。旧約が難しいと感じるゆえんです。

しかしイエス・キリストは、何度も旧約の御言葉を開き、旧約の中に救い主キリストが預言されていると言われました。新約の時代になって突然に神のご性質が変わったのではありません。旧約の中に救い主キリストがすでに現されています。今朝の箇所もそうです。どのようなことなのか見て参ります。

1 主を慕い求めた

(1) 神の箱は戻ったが

かつて契約の箱が敵の手に奪われたときは、イスラエルから神の栄光が去ってしまったと落胆しました。しかし今、ペリシテ人の手に奪われた神の契約の箱は無事にイスラエルのところに戻ってきました。キルヤテ・エアリムという町に運び上げ、エルアザルが実際に契約の箱を管理するようになりました。元の平安な生活を取り戻していったかに見えました。

ところが2節の最後にこうあります。「イスラエルの全家は主を慕い求めていた。」聖

書の欄外には別訳が載っていて「主を求めて嘆いていた」とも書かれています。契約の箱が戻ってきたのに、イスラエルの人たちは主を慕い求めて嘆いていた。言い換えれば、心が満たされないということです。

(2) 他の神々を拝んでも満たされない

恐らくその直接の原因は、ペリシテ人との争いが絶えなかったことに関係していると思われます。ペリシテ人は契約の箱を返しはしましたが、イスラエルとの間にはなお緊張関係が続いていました。

いつも何かにおびえながらの生活です。心には平安がありません。そんな不安をすぐに解決してくれそうなものを捜します。そこで、バルと呼ばれる神やアシュタロテと呼ばれる地元に古くから伝わる神々を拝むようになっていきます。拝んではいましたが、しかしそれでも満たされません。

このことは、今の私たちと似ていると事があります。日本の家には一般に仏壇というものが置かれています。あるお仏壇屋さんのポスターにこんな言葉が書かれていました。「仏壇は心のともしびです。」多くの方が仏壇を買い求めます。それで心の平安は得られたのでしょうか。心の飢え渴きは満たされたのでしょうか。そんなことはありません。仏壇の前で手を合わせているときは落ち着くかもしれませんが、お香を焚くとか、線香を焚くと落ち着く、「いやされる」と言う方もいます。しかし、心の深いところにある苦しみ

は解決しないままです。旧約の時代も、今の時代も、人間の悩みは全く変わりません。

2 サムエルとイスラエル

(1) 「心を尽くして主に帰りなさい、救い出される」

3節でサムエルが登場してきます。今やサムエルは壮年を迎え、イスラエルの霊的な指導者となっています。サムエルは語ります。

「もし、あなた方が心を尽くして主に帰り、あなたがたの間から外国の神々やアシュタロテを取り除き、心を主に向け、主にのみ仕えるなら、主はあなたがたをペリシテ人の手から救い出されます。」

いろんな神がいて、それで良いのではないかと言う方もいます。どうして他の神を捨てなければならないのでしょうか。理由は二つあります。一つ目は単純な理由です。天と地を造られた神がすべてを支配しておられるから。他の神々がどんなにすばらしく見えたとしても、何の力もないのです。かつてペリシテ人の信じていたダゴンの像は神の手によって倒れ砕け散りました。しょせん石を削ったり木を彫ったものに過ぎない。無駄なことは止めなさい。これが一つ目の理由。

二つ目の理由。神は天と地を造られました。人間はその神によって造られたものである。もし本当にそうだというのなら、神と私たちと人間は、本来どんな関係にあるのか。イスラエルの人々は、神を自分の都合の良いようにしか考えませんでした。人間に仕えるのが神だと思い込んでいました。ところが本当は逆で、本来、私たちが神に仕えなければならない存在です。しかし人間というものは誠に勝手なものです。いのちを与えてくださっている神に向かい、そんなご恩も忘れて、神は

私に仕えるべきだと言い放っている。これが私たちの姿。

だからサムエルは言うのです。「主にのみ仕えなさい。」それは、元々の人間の本来の姿に戻りなさいということです。ところが、私たちは仕えるという言葉を聞いただけで、拒絶反応を示します。神と人間は奴隷関係なのかと反論します。もし奴隷関係だというのは、そんな神はまっぴらごめんです。皆さんも同じでしょう。もちろん、私たちが神の奴隷だとは言っていません。では、「仕える」とはどんなことなのか。それはまた後で触れたいと思います。

(2) イスラエルの応答

サムエルの言葉に動かされたイスラエルの人々は、言われたとおりに実行していきます。ここを読んで皆さんはどう思いますか。「すぐに応答していったイスラエルはすばらしい信仰だ。」

誤解しないでいただきたい。2節で「二十年間」という月日が流れていたことを思い出してください。どうして二十年間とも思いませんか。サムエルがもっと早くに出てきて指導すればとよかったのに。そうしたとしましよう。イスラエルはサムエルの言葉を聞き入れたか。いいえ。無視したはずです。飢え渴きを自覚していないからです。

そうしますと、二十年間、神は何もされなかった。無駄な時間が流れたのではありません。イスラエルが飢え渴きを自覚し、悔い改めるためにこれだけの時間がかかる。イスラエルにとって必要な時間だったということです。

ときどき、難しい問題がなかなか解決されず、「神は何もしてくれない」と嘆くことが

あります。神が私たちのことを無視しているのではありません。もしかすると、私たちが何か大切なことに気がつくための必要な時間なのかもしれない。そんな神のご計画がある。ですから、神を恨むのではない。むしろ、神が私たちのことを忍耐して待っていてくださることに目を留めたいと思います。

(3) 「私たちは罪を犯しました」

かつてイスラエルは、ペリシテ人との戦争の時、神の契約の箱を持ち出しました。この箱さえあれば、自分たちはペリシテ人に勝ると豪語しました。神に仕えるどころか、神を自分たちの都合の良いように利用しようとしました。戦いに敗れても、契約の箱が奪われても、そしてペリシテ人の所から契約の箱が戻ってきてても、イスラエルは自分たちがどんなことをしたのか、神に対してどれだけの罪を犯したのか、自覚することはありませんでした。罪に向き合わないまま過ごしてきました。

聖書を読むと、人間は神に罪を犯したと言われ、いやになることがあります。だからキリスト教は嫌いだと言う方もいます。では、いやだからと言って罪に向き合わないままでいたならどうなるのでしょうか。このイスラエル人のようになるということです。たましいの飢え渴きを覚えて苦しみ続けるということです。どちらがいいのでしょうか。

罪に目を向けず、心の飢え渴きを見ないようにし、この世の楽しみを求め続けることは可能かもしれない。しかし、いつまで続くのでしょうか。ある時、死を間近に感じ始めるときが必ず来るのです。そんなとき、この世の楽しみが私たちを救えるのでしょうか。「あなたは重い病気にかかっています」と宣告さ

れた瞬間、あんなに楽しかったことが、まったく色あせてしまう。そんな話をよく聞きます。死を間際にして、罪を思い出し、神にさばかれるのではないかとおびえる方もいます。結局遅かれ早かれ、私たちは自分の中にある飢え渴き、あるいは罪というものに直面するときに来るのです。

イスラエルは二十年を経て、自分たちの罪に向き合おうとしていきます。罪を主の前に告白していきます。「私たちは主に対して罪を犯しました。」神はこのときを待っておられました。

(4) イスラエルのために祈る

神は、悔いた心を最も大切になさいます。罪を心から告白する者に、ご自分の恵みを注ごうとされます。

サムエルは二つのことをしようとします。まずこう言います。5節。「私はあなたがたのために主に祈りましょう。」サムエルが自発的に行っているように見えますが、そうではありません。サムエルを通して神が働かれています。主の前に悔い改めているイスラエルを救うために、サムエル、あなたがたイスラエルのために祈るのだ。あなたが代わって祈りなさい。そのような神の促しがあるのです。悔いているイスラエルの心に答えようとされます。

(5) 全焼のいけにえを主にささげる

9節に、「サムエルは乳離れをしていない子羊一頭を取り、焼き尽くす全焼のいけにえとして主にささげた」とあります。

前回のことを少し思い出してください。ペリシテ人のところから契約の箱が戻ってきたとき、イスラエル人は全焼のいけにえをさ

さげました。二頭の雌牛が全焼のいけにえでした。二頭の雌牛はペリシテ人が用意したものでした。イスラエルは何も犠牲を払おうとはしませんでした。ところが今イスラエルは、自分の持ち物を犠牲としてささげようとしています。神の前に悔い改める者の姿がここにあります。

3 イエス・キリスト

(1) 仕えてくださる方

さて、「乳離れしていない一頭の子羊を殺し、全焼のいけにえとしてささげる」とあります。「かわいそうだ。神は残酷だ」と感じます。ここでも、人間は矛盾したことを平気で口にします。神が残酷なのではありません。もし残酷だと言うのであれば、人間が犯した罪というものだけがこれだけ残酷なのだと言うことです。私たちはどこまでも鈍感なので、このように目に見えるようにしないと、自分の犯した罪の大きさがわからないのです。

しかしどうして乳離れしていない小さな子羊なのでしょう。二頭の雌牛の時もそうでした。まだ乳を飲ませている子牛と母親が別れ別れにさせられました。ここでもそうです。

最初に、旧約の中に救い主が示されていると申しあげました。この箇所も、救い主キリストという視点から見ないと、すべてが残酷だ、かわいそうだ、恐ろしいことだということと終わってしまいます。

サムエルがしていることは、すべてイエス・キリストが十字架でなされたことを示しています。

乳離れしていない子羊は、救い主キリストを象徴しています。母親の羊と産まれて間もない子どもの羊。例え動物であっても、非常

に強い愛情で結ばれています。それが引き離され、殺されていく。

それはとりもなおさず、父なる神のところから、愛するひとり子イエス・キリストが罪の世界に、人となって来てくださったことを現します。この方は、父なる神から引き離されました。神御自身が十字架で焼き尽くす全焼のいけにえとなられました。父なる神のさばきを受けられたということです。私たちに救いを与えるために、神はこのような方法をとられました。神がどれほどに私たちを愛しておられるのか、鈍感な私たちにわかるように示すために、ご自分のからだ、ご自分のいのちをささげて下さいました。

先ほど「神に仕えなさい」と言われたことに触れました。そこだけ読むと、いやだなと感じます。ところが、神の方が私たちに対し奴隷のようになられ、仕えてくださっている。そうすると、どうなるでしょう。神に仕えることは、私たちが奴隷になることでは決してないということ。むしろ、本当の自由、本当の喜び。私たちの魂が、心の深いところから待ち望んでいるものが与えられていく歩みだということ。です。

(2) とりなしてくださる方

神に対して大きな罪を犯してきたイスラエルを救うために、神はサムエルに対してイスラエルのために祈れと命じます。9節の最後の言葉に目をとめていただきたい。「サムエルはイスラエルのために主に叫んだ。それで主は彼に答えられた。」

サムエルが主に祈り叫びました。神はサムエルの祈りに答えられました。ここに聖書の原則があります。

私たちは祈りの最後に言います。「主イエ

ス・キリストの御名によって祈ります。」ちゃんとした意味があります。私たちはイエス・キリストを抜きにして神に祈ることができない存在なのです。もちろん「父なる神よ」と祈ります。しかしそれはあくまでも「主イエス・キリスト」が私たちの仲介者に立ってくださっていて、私たちの祈りをキリストがとりなしてくださって、父なる神に完全な祈りとしてくださる。キリストがおられるから、私たちは父なる神に祈ることができる。そのことを覚えていただきたい。

私たちは何気なく言います。「祈りがきかれた。」あるいは「祈りがきかれない。」まるで、人間の祈りの力によって神を動かすかのように言われるときがあります。今朝の箇所から教えられます。私たちは、キリストのとりなしがあるので、そこで初めて父なる神に祈ることが許されている者なのだということです。「心を主に向け、主にのみ仕えるなら、主は救ってください。」このみことばはそのことを現しています。

実は神に祈ることもできなかつた私たちだったのです。そんな私たちを救うために、神がどれだけの恵みを施しておられるか覚えます。私たちが本当の自由と本当の喜びを取り戻すことができるように、神はあらゆる事をなさってくださいます。